報　告

天山山脈カラサイ・タラガイの考古学的踏査

山　内　和　也※

※　帝京大学文化財研究所

はじめに
Ⅰ．調査地点A（カラサイ川の渡河点）
Ⅱ．調査地点B（クズル・エシュメ）
Ⅲ．踏査の成果
おわりに

はじめに

2022年８月に行った天山山脈の考古学的踏査では、ベデル峠の北西約12kmに位置するキャラバンサライと想定される建物址の確認、賈耽の『道里記』と杜環の『経行記』に見られる地名に対応する地点を確認し、このベデル峠を抜けるルートが玄奘の天山山脈越えのルートであったことを示した。同ルートの調査成果については、2022年１月22～23日に帝京大学文化財研究所で開催された「シルクロード学研究会 2022 冬」において口頭で発表を行った（１月22日）。なお、その内容については、同研究会にあわせて発行された『シルクロード学研究会 2022 冬 資料集』に「玄奘の道－天山山脈越えのルート」（山内和也、佐藤剛、齊藤茂雄共著）として収録されている（pp. 62-82）。

2022年に引き続き、2023年８月17～19日に、2022年の調査成果の検討の結果得られたいくつかの課題を解決することを目的として、カラサイ・タラガイ地区において考古学的踏査を行った（図１）。

その課題は以下の通りである。

・ウシュトク峠とタラガイ平原の間を流れるカラサイ川の渡河点を確認する。
・同渡河点に関連する施設（検問所、砦等）が存在するかどうかを確認する。
・賈耽の記録に登場する「赤山城」というものがどのようなものであり、それに関連する建物址あるいは都市遺跡が存在するのか否かを確認する。なお、賈耽の記録の関連部分は以下の通りである。「さらに40里で抜達嶺［ベデル峠］をこえる。さらに50里で頓多城に至るが、（ここは）烏孫が治めていた赤山城である。さらに30里で真珠河を渡り、・・・」。
・ウシュトク峠を北に下ると、カラサイ川の北側（対岸）に「赤い色」をした山が見えることから、これが「赤山城」に関連するものと想定し、その南山麓部分にどのような考古学的遺構が存在するのかを確認する。

なお、本稿では、衛星画像として、Bing Maps（https://www.bing.com/maps, 2023年 8 月20日 閲 覧）を用いた。

Ⅰ．調査地点Ａ（カラサイ川の渡河点）

現在、カラサイ川を渡る橋は、カラサイ川の東側上流域のやや川幅が狭まった地点にある。ここを調査地点Aとし（図１）、「ウシュトク峠とタラガイ平原の間を流れるカラサイ川の渡河点」、」そして「同渡河点に関連する施設（検問所、砦等）が存在するかどうか」を確認するために調査を行った。

1）渡河点

踏査の結果、カラサイ川のかつての渡河点の候補地点として考えられるのは、現在の橋が架かっている地点のやや上流の地点と考えられる（図４）。その理由は以下のとおりである。

・ウシュトク峠から北側へと下る道がカラサイ川に突き当たる地点にある。
・この地点では川幅が狭まっており、かつ川岸は崖ではなく、両岸の川岸が比較的なだらかな斜面となっている（図５、６）。
・川の下流、西側では川幅が広く、渡河に適した地点が見当たらない。

2）渡河点の候補地点の南側に位置する建物址（？）

渡河点の候補地点の南側、現在の道路の北側では、上面が平坦で、周囲より一段高くなった小さな丘の存在が確認された（図７～９）。平面の形は方形のよ

うにも見えるが、明瞭ではない（図８）。また、周囲に比べて大小の石が多いとはいえるものの、明確な壁や部屋のような構造物を確認することはできなかった。他方、墳丘墓である可能性も残されている。

いずれにしろ、この構造物の性格や機能を明らかにするためには、学術的な発掘調査を必要である。

なお、この構造物の周辺では、墳丘墓（クルガン）やかつての道路（近代～現代の道路か？）の存在も確認された（図10、11）。

Ⅱ．調査地点Ｂ（クズル・エシュメ）

調査地点Bとして対象としたのは、カラサイ川の北側、段丘上になった東西に伸びる尾根とその北側に位置するカイラク・タシュ山の間の谷で、クズル・エシュメと呼ばれる地点である（図12）。クズル・エシュメは、カイラク・タシュと呼ばれる中腹より上方の山肌が赤みを帯びている、いわゆる「赤い山」の南側山麓にあたる（図13～16）。また、想定されるカラサイ川の渡河点から西、もしくはいったん北に向かい、そこから西へ向かうとこの谷に到達できる。

それゆえ、このルート上にかつての道の痕跡が存在するかを確認すること、そして、カイラク・タシュ山が賈耽の記録に登場する「赤山」城と何らかの関係があるのか、また、その南山麓部分に「赤山城」に関連する構造物が存在するかを確認することを目的としてこのクズル・エシュメで踏査を行った

踏査の結果であるが、残念ながら、このクズル・エシュメでは想定していた道や構造物の痕跡は確認できなかった。

Ⅲ．踏査の成果

今回の踏査の成果は以下の通りである。

・ウシュトク峠とタラガイ平原の間を流れるカラサイ川の渡河点については、現在の渡河点（橋）のやや上流に位置していた可能性がある。

・現在の渡河点の東側、おそらくかつての渡河点の東側にあたる地点には、建物等の構造物とみられるものが存在するが、その構造や機能を明らかにするには、学術的な発掘調査が必要である。

・賈耽の記録に登場する「赤山城」に関連する建物址の存在、および「道」の存在を示す明確な証拠は得られなかった。

おわりに

ベデル峠を抜ける天山山脈越えのルートは、玄奘が辿ったルートであり、賈耽が記録したルートでもあるだけでなく、おそらく張騫が烏孫の赤谷城を訪れた際にも用いたルートであると想定される。その意味で、「天山山脈越えのシルクロード」ともいうべきものである。残念ながら、今回の踏査ではそのルート、「道」の存在を示す明確な証拠は得られなかったが、今後も「天山山脈越えのシルクロード」の実態を解明するための調査を継続していく予定である。

本研究はJSPS科研費H00702（基盤研究(B)「中央アジア仏教遺跡の多様性の形成過程に関する考古学的研究」研究代表：岩井俊平）の助成を受けたものである。

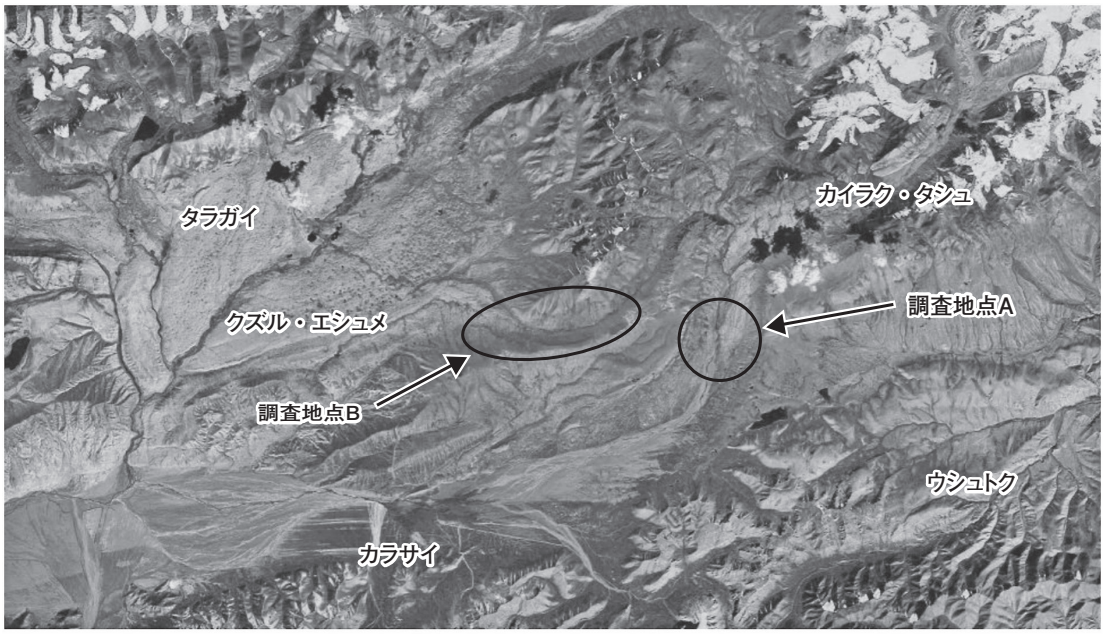

図１　カラサイ－タラガイ地区

図２　カラサイ川

図３　道路に溢れた水（カラサイ）

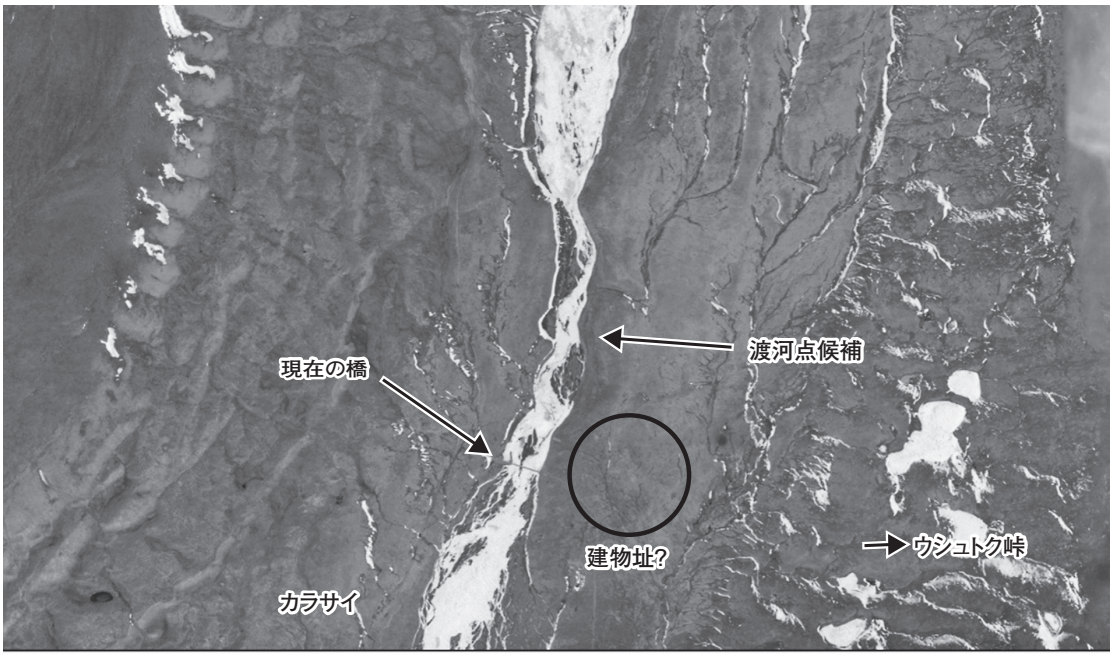

図４　カラサイ川の渡河点の候補地点

図５　カラサイ川の渡河点の候補地点（西から）

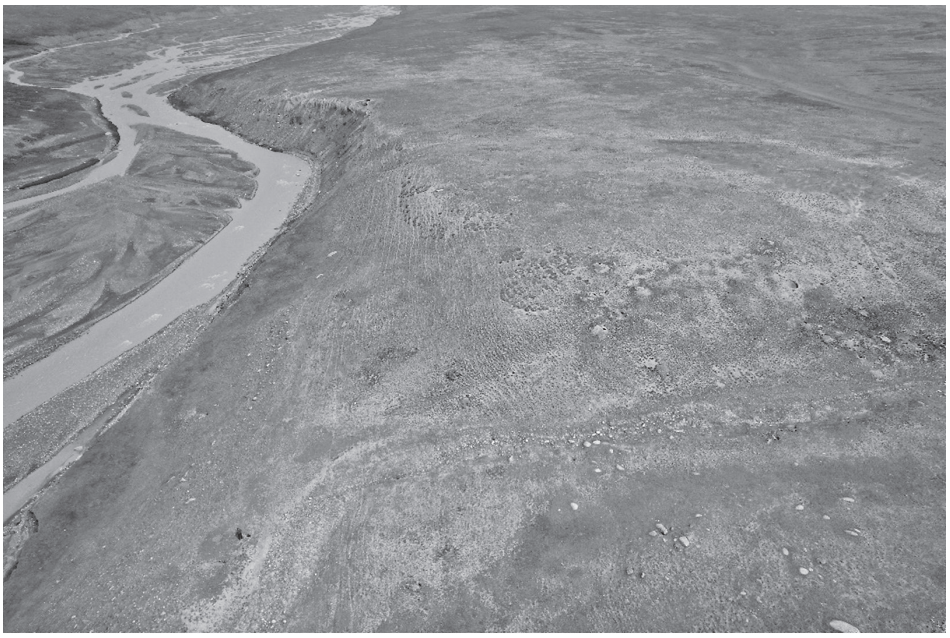

図６　カラサイ川の渡河点の候補地点（ドローンによる撮影）

図７　建物址？（東から）

図８　建物址？（西から）

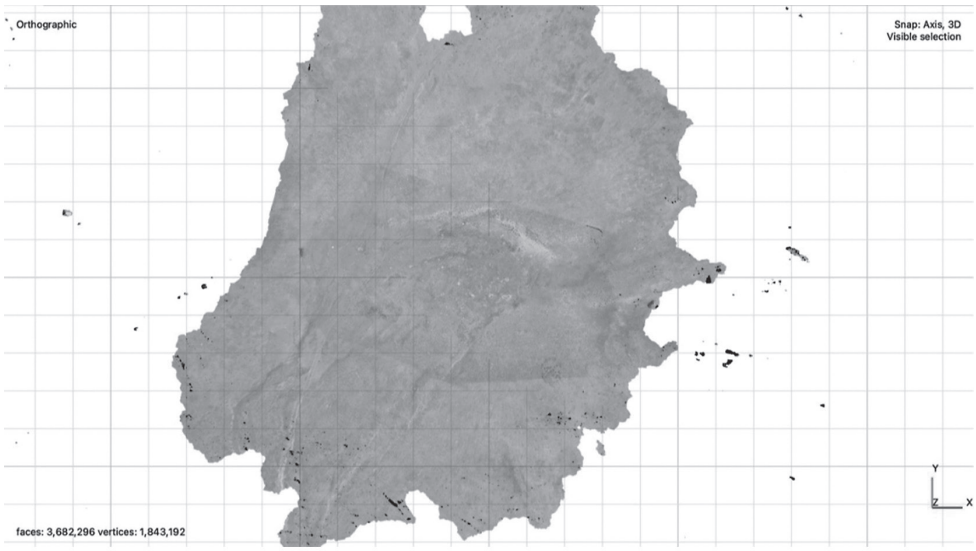

図９　建物址？（ドローンによる撮影）

図10　墳丘墓

図11　道路跡

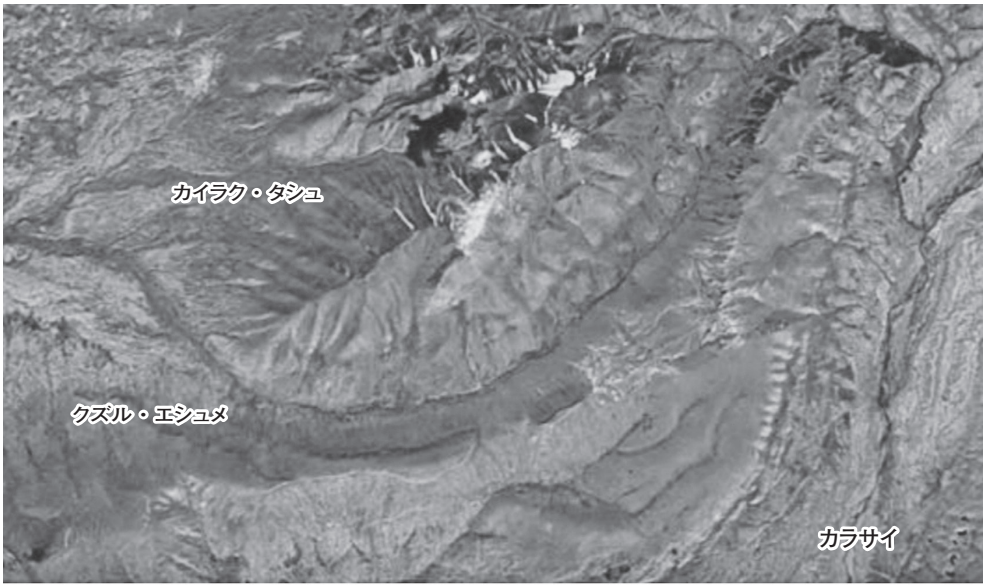

図12　クズル・エシュメおよびその周辺

図13　カイラク・タシュ（近景）

図14　カイラク・タシュ（遠景）

図15　カイラク・タシュの南側を流れる川

図16　カイラク・タシュの南側を流れる川の上流域